

巻頭エッセイ

歴史忘却の時代に

杉浦 勢之

1 歴史を考える

歴史についてこれほど過剰に語られる時代はないように思う。しかし、本当の意味で歴史が問われているのかと顧みると、これほど歴史が軽んじられるようになった時代も少ない。現場にいと、高校までの教育で、歴史教育が細っていつてしまっている感は否めないが、もともと筆者が高校までに学んだ歴史の授業も、「暗記科目」の扱いであった。教科書にゴシックで記された「重要単語」が社会全体の中でどのような意味を持ち、それが時代の中でどのように機能したのか、それが今の我々をどのように規定し、これからの選択を制約するのか頭の上で「分かった」のは、大学に入ってからであった。だがそのことが、どのようにして我々の未来を決めるのかを考えることは、それほど簡単ではなかった。

「天界の一般自然史と理論・自然科学の形而上学的原理」によって研究を開始したイマヌエル・カントは『純粹理性批判』のI「超越論的原理論」の第1部門「超越論的感性論」の1節および2節を「空間について」、「時間について」としている。スコットランド啓蒙の客将デーヴィッド・ヒュームの経験論によって大陸合理論の「独断のまどろみ」から覚まされたカントは、その超越論的論理展開の出発点を、人間の感性的現象世界成立の条件として時間・空間を原理的に捉えるところに求めた。このことはそれ自体としてとても大事なことであるが、同時に彼が大学において経験論に配視した「自然地理学」と「人間学」を絶えることなく晩年まで講義しつづけたことを重ね見ておく必要がある。そこには、ヒュームとともに、ジャン・ジャン・ジャック・ルソーとの出会いが介在していた⁽¹⁾。

カントにおいては、経験の学として、空間は地理学の方へ、時間は人間学の方へと開かれており、『三批判書』を媒介にした経験的「総合」(Synthese)の方には、歴史という地平が予感されていたのである。事実講義を受講したカントの弟子でもあったヨハン・ゴットフリート・ヘルダーは、前批判期のカント哲学に沿いつつ、歴史哲学に向けて「航海」の旅に立ち、ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテの嘆きにもかかわらず、カントと袂を分かっていく。またヨハン・ゴットリープ・フィヒテに始まり、早熟のフリードリッヒ・ヴィルヘルム・ヨーゼス・フォン・シェリング、遅咲きのゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲルによって完成されるドイツ観念論や、カール・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・フォン・シュレーゲル、その兄

1 因みに大陸を追われたルソーをヒュームはイギリスに迎えるが、ルソー側の被害感情から絶縁している。当のそのひとが何を言っているかと、当のそのひとが何ものであるかは必ずしも一致しない。書簡を通じて生まれた「文芸の共和国」におけるスキャンダルの一コマと言ってしまうればそれまでであるが、そのどちらを評価するかは、評価する側の問題意識と立ち位置によるであろう。この点でカントは、ルソー以上に、ルソーの書いたことに誠実であったと言えるかもしれない。それは、『人間不平等起源論』と『社会契約論』を架橋するための愚直なまでの途であった。ただし、彼の「歴史哲学」の「原像」は、ルソーと逆のベクトルを目指している。山崎正一+串田孫一『悪魔と裏切者-ルソーとヒューム』(筑摩書房、2014年)。

アウグスト・ヴィルヘルム・フォン・シュレーゲル、ノヴァーリス、ルードヴィヒ・ティークなどのイエナ初期ドイツローマン派は、その先の道に進んでいくことになった。ドイツ観念論は、イエナに「世界精神」が馬に乗って進むのを目撃し、ドイツローマン派はゲルマンの森のしじまに天才の誕生を言祝いだ。啓蒙主義の神々の後、疾風怒濤（Strum und Drang）の偉人たち（ゲーテ、シラー）の驥尾に付し、何しろたった25年の間にドイツで何かが起きていたのだ⁽²⁾。むろんここで、哲学史の素描をしようと言うのではない。またその任に堪え得るのも思っていない。初期近代と近代との過渡期に学問的職業人として生きたカントが、同時代に

- 2 エルンスト・カッシーラは、18世紀啓蒙に歴史がないという通説を明確に否定している。カントは、『自然地理学』において場所的記述を地理学に、時間的記述を歴史学に振り分けている。これに対し、『人間学』自体は、後述するカントの哲学の4つテーマのうちの最後の問い、つまるところカントの哲学とはそれであると自身が述べている「人間とは何か」に経験世界において対応するものであり、直接歴史を問題とするものではないが、この問いに、従来美学との関係で論じられる傾向の強い『判断力批判』、特に第二部「目的論的判断力の批判」を読み直してみると、ほんやり浮かぶものがある。自然の最終目的が人間にあるとともに、人間は道徳的存在であることにおいて自然の究極目的となるが、加えて人間が究極目的であることは文化（Kultur）によってであるとされている。さらにここで文化が、自然の法則的力を人間の自由な目的に活用する実践的態勢であるとするならば、これにより自然誌（Naturgeschichte）と人間的自由の歩みは反省的に並立（必然の王国と自由の王国）され、純粹理性と実践理性の批判的和解もなされるであろう。先にほんやり浮かぶと述べたのは、カントのタームでも、理性—悟性—感性の要所に登場し、最も理解が難しい（ということは定義がテキストの中で不安定な）「構想力」（Einbildungskraft）の働きである。三木清は『歴史哲学』において、「叙述された歴史」、「出来事としての歴史」に加え、「事実としての歴史」を提唱した。ここにおける「事実」（Tatsache）は、厳密に行為（Tat）と物（Sache）との一体性であり、出来事を創造する原歴史（Ur-Geschichte）をなすとされる。また、感性的自己の身体的行為こそがこのような歴史の根源性を基礎づけるのは、我々の身体が「社会的身体」であるからとし、ロゴスとパトスを問題にしている。三木は、マルティン・ハイデガーの『カントと形而上学の問題』（第1版A・第2版B問題）に着想を得、ロゴスとパトスの生成の根底に構想力を見出すようになる。彼の未完に終わった『構想力の論理』においては、カントの構想力を『純粹理性批判』の第1版Aに即して感覚、構想力、統覚の3つの主観的根源の源泉（心の能力）から、3つの総合（①直観における覚知の総合、②構想における再生の総合、③概念における再認の総合）を取り出し、それはまた①感覚による先験的な多様の共感、②構想力によるこの多様の総合、③根源的統覚によるこの総合の統一ともされ、それぞれの総合に経験的総合と純粹総合があると整理、吟味しつつ、神話や制度、技術そして経験それ自体に分け入り、歴史的構想力と行為の創造性を取り出そうとしていた。（因みにヒュームも『人間本性論』の不評に激怒し、大著『イングランド史』を書いて大成功している）。このように三木を歴史の方へ促迫していたのは、第1次世界大戦とロシア革命、そして満州事変というまさに歴史が大きく転換しようとしていた20世紀という時代性であったろう。同時代にはヨーロッパで歴史主義との格闘を進めていたヴァルター・ベンヤミンが歴史の根源に向けて思索を進めており、ナチスに追われる中、絶筆となった『歴史哲学テーゼ』を書き続けていた。二人はともに神話を問題とし、技術を問い直した。（ユダヤ人であったベンヤミンのほうが神話的暴力に鋭敏であったろうが）。1929年ダボス討論で対峙した新カント派のカッシーラや、現象学派のハイデガーを意識していたことは明らかである。また二人ともジョルジュ・ソレルの『暴力論』から触発され、独自の議論を展開もしている。それは、カントが『世界公民的見地における一般史の構想』の中で「非社会的社交」として倫理的次元から歴史の推力と認めざるを得なかったところのものである。啓蒙専制君主であったフリードリヒ2世の治下、ケーニヒスベルグに棲まい続け、反動の予感に耐えたカントに対し、二人は神話的暴力—生の暴力に晒され、ベンヤミンはスペインへの逃避行の途上、ビレーネ山中で自殺している。三木も豊玉刑務所に微罪であったのにもかかわらず収監され、敗戦直後に独房に放置され死亡している。二人はともに悲劇的死を迎えることになるのだが、ベンヤミンは、「経験の貧困」を掲げ、カント哲学との格闘からその研究を開始したが、歴史が緊張する中、ハイデガーに衝撃を受けた三木が立ち返ったのもカントであったということには、それ相応の理由があったであろうということである。カントが「人間とは何か」という問いを通じ、歴史哲学のとは口に立っていたこと、そしてフランス革命という歴史化されるべき（そして現代にまで続く）事件の同時代者として誠実に、かつ厳密に向き合っていたということも、三木は正確に捉えていたのである。牧野英二「歴史哲学における最高善の意義」（カント研究会編『現代カント研究5 社会哲学の領野』、晃洋書房、1994年）。三木清『構想力の論理』第1、第2（岩波文庫、2023年）。エルンスト・カッシーラ『啓蒙主義の哲学 上下』（中野好之訳、筑摩書房、2003年）。ニコラス・フィリップソン『デーヴィッド・ヒューム 哲学から歴史へ』（永井大輔訳、白水社、2016年）。エッカート・フェルスター『哲学の25年 体系的な再構成』（三重野清顕他訳、法政大学出版局、2021年）。ヴァルター・ベンヤミン『【新訳・評注】歴史の概念について』（鹿島徹訳・評注、未来社、2015年）。同『来るべき哲学のプログラム』（道籙泰三訳、晶文社、2011年）。同『暴力批判論』（野村修訳、岩波書店、1994年）。マルティン・ハイデガー『カントと形而上学の問題』（門脇卓爾訳、『ハイデガー全集3』、東京大学出版会、2021年）。『ダボス討論（カッシーラ対ハイデガー）カッシーラ夫人回想録』（岩男龍太郎・真知子訳、リキエスタの会）。

おけるヒュームの『人間本性論』により、世界観の根底を揺るがされ、学の基礎づけに向かうとともに、ルソーの『エミール』によって感性的で素朴な人間に目を開かされ、フランス革命がジロンド派と水平派の粛清を通じ、恐怖政治（政治的テロリズム）に陥っていく中でも、その理念に慎ましく忠実であったことに、歴史的時間の「今」を生きることを見たいということなのである。『三批判』の残りの2書、『純粹実践理性批判』、『判断力批判』は、フランス革命の直前および直後に、『人倫の形而上学の基礎づけ』は革命前の1785年、『人倫の形而上学』は1797年に刊行されている。後者は1794年テルミドールのクーデターによってジャコバン独裁が終焉し、マクシミアン・ロベズピエール、ルイ・アントワヌ・ド・サン＝ジェストらが断頭台の露となった後のことである。カントは思索と並行する事実の推移の中に、理念の統制的使用を通じ、来るべきものを見極めようとしていたのではないか。視霊者（エマヌエル・スヴェーデンボリ）を避けたとはいえ、これはほとんどカントのヴィジョンということになる。visionという言葉は、ラテン語visioから来ている。この言葉ぐらい巷に氾濫しながら、理解されにくいものはない。ノースロップ・フライやハンス・ブルーメンヴェルグの浩瀚な研究に触れれば、ユダヤの預言者—イエス—パウロ抜きに、ということはユダヤ・キリスト教（特に裏筋の神秘主義や修辞学の伝統）の文脈抜きに、この言葉に力を与えることは難しい。本来日本人（ないし非西欧文明）には、とても扱いきらいものである。

ところでカントは自らの哲学のテーマを「私は何を知り得るか」、「私は何をなすべきか」、「私は何を望むことが許されるか」、「人間とは何か」の4つに置いていた。この最後の問いに触れると、思い起こされるのは、ポール・ゴーギャンの絵画「我々はどこから来たのか 我々は何ものか 我々はどこへ行くのか」である。この題名については、ゴーギャンが少年時代に受けたカトリック教会の「公教要理」（カテキズム）による教育にあったものとされている。キリスト教の伝統のないこの国のものとしては、この問いは何か深淵かつ深遠で、絵画と同じくらい惚れ惚れとしてしまい、問いの余韻だけでしみじみしてしまいそうなどころなのだが、キリスト教世界にあっては、答えは明確であって、そこに創造主＝神を置いて見れば、キリスト教的「普遍史」が導き出されるようになっている³⁾。カントは、理性の限界の範囲内で、自由な人間の歴史に接近しようとしていたが、自然人を描き出したルソーの末裔であるゴーギャンは、ほとんど精神的に無防備の状態でもヨーロッパを脱出し、自然人の世界と思しきタヒチに赴

3 もっとも、この有力な論に対し、この問いが、トーマス・カーライルのフィクション『衣服の哲学』、語り手（編集者）である「私」が、ドイツ人のトイフェルスドレック教授から進呈された作品中作品『衣服 その起源と構造』を読み解いていくという込み入ったものであるが、その中で確かにこれと類似する問いが語られていた。ことがカーライルとなると、事態は複雑になる。カーライルについては、ノヴァーリスの信奉者であったことはもとより、後期シェリングの講義を聴講したフリードリヒ・エンゲルスが、ドイツ人には親しいがイギリス経験論—懐疑主義の土壌では理解されにくいだろうとし、初期のシェリングないしヘーゲル左派であったダーフィット・シュトラウスの影響を指摘している。スコットランド啓蒙の終焉点に位置するカーライルにおいて、カントによって切り拓かれたドイツ観念論の始点と終点がもう一度スコットランドの岸辺に打ち返されていることになる。カーライルがルソーの批判者となっていったことも考慮すると、ゴーギャンがもしカーライルに何らかの影響されていたとすれば、素朴な「野生」は成り立ちそうにない。そうであれば、技法としてのクロワゾニズムを反省的にとらえゴーギャンの提唱した「総合主義」（Synthétisme）に、その「創造性」の痕跡が現れているのかもしれない。日本に生まれ育ったものにとって厄介なのは、カーライルは内村鑑三や新渡戸稲造に強い影響を与えており、新渡戸の『武士道』には2か所、かなり重要なポイントでカーライルの名前が挙げられている。こういった近代日本における西欧化の精神的熱冷ましには、夏目漱石に聞くにしくはない。『吾輩は猫である』の胃弱はさて置き、流石に漱石というか、「カーライル博物館」では、英雄を称揚したカーライルを、カントの「活力」を詰ったショーペンハウアーと好一対であると評し、日本人でここを訪ねたのはあなたが初めてと告げられたことをあえてさらりと述べ、家を選ぶにあたって「愚物の中に当然勘定せらるべき細君…の助けに依らなくては駄目と覚悟」したのだらうと綴っている。トーマス・カーライル『衣服の哲学』（宝山直亮訳、『カーライル選集1』日本教文社、2014年）。新渡戸稲造『武士道』（矢内原忠雄訳、岩波書店、1974年）。夏目漱石「カーライル博物館」（『夏目漱石全集2』筑摩書房、1987年）。

き、この大作を描いた直後、自殺を試みている。もっとも実際には、ゴーギャンは船員として世界を航海しており、タヒチにはプロテスタント、カトリック双方が宣教に入り、キリスト教化を通じてオロ信仰は衰えつつあったことは掴んでいたであろう。ゴーギャンが訪れるほぼ10年前には、フランス植民地に編入されている。タヒチ行きは、それを知っての行動であったとしなければならない。ゴーギャンの面倒くさは、それを知りながらタヒチに渡り、19世紀ヨーロッパの植民地主義に物申しているところであろう。彼はそこで、複数の現地の少女たちとの交感を通じ、混淆した精神状況を新約、そして旧約（Tanakh）と遡行し、キリスト教普遍史の原初に立ち返って総合していく。ヨーロッパに残してきた娘を失い、健康を害し、経済的に困窮したゴーギャンが、自らのパーソナル・ヒストリーの終焉点を人類の普遍史と永劫回帰を重ね合わせ、一点で垂直に交わせる特異点、その場所に求めたとすれば、それはもしかしたら、現実のどこにもない「カイロス」の時間となったかもしれない。しかし彼は死に損なった。神を個人の信仰の問題に収めることで、カントが揺らぎの中で構築してきた普遍的な「人間の足場」が失われゆく時代に「我々」を見出し得なかったゴーギャンにとって、この問いが持つ深淵と深遠は、ヨーロッパの画家であるこの「私」の絶望的孤独に回収されるしかなかったのだと言えそうである。

この絵画が描かれ始めたのは1897年のことであり、カントが『人倫の形而上学』を書いたちょうど100年後のことになる。ヨーロッパは世紀末にかかっており、歴史主義は隆盛に向かっていたが、第一次世界大戦で理性主義が瓦解していく20世紀がもうすぐ始まろうとしていた。オーストリー・ハンガリー帝国臣民のプロニスワフ・マリノフスキーが、第一次世界大戦のため敵国人として留め置かれたバブア・ニューギニアでのフィールドワークの成果を『西太平洋の遠洋航海者』として刊行し、クラ交換を解明したのが20世紀に入った1922年、ケーニヒスベルクのカントのように、一度としてフィールドを訪れることのなかったマルセル・モースが、メラネシアやポリネシアの一般交換にマナ、ハウの力を見出し、ヨーロッパの太古に同じ力を発掘した『贈与論』を公刊したのは1924年、歴史学のマチスを自認していたフェルナン・ブローデル、「超越論的主観なきカント主義者」を引き受けると豪語したクロード・レヴィ＝ストロース、後に時間と空間との異なる方向を見据え、それぞれの構造主義（アナル学派と構造主義人類学）を創始し、ヨーロッパの知的世界を席卷、ヨーロッパ中心主義を掘り崩していくことになる二人の若者がブラジルに渡り、新設のサンパウロ大学に赴任するのは、第二次世界大戦に向けて時代が屈折していく20世紀の30年代のことであった。繰り返しになるが、歴史を考えるということは、歴史的年代を暗記することではない。史料やデータをいじり数量化された時間軸に配置すること（それはそれで大事な作業であるが、これは時間の空間への還元という感性形式の悟性による思考操作である）だけでもない。構想力によって過去を回復し、反省的に問い直すことで、我々が何ものであるかを厳しく吟味し、未来を手繰り寄せていく創造的行為実践、それが歴史を考えるということであろう。

② 歴史を生きる

いささか迂遠な話になってしまったので、現代の日本に話しを移したい。筆者は経済史学を学ぶところから研究を開始したが、それとともに長らく企業史のプロジェクトに参画してきた。専門でないひとから見れば、同一領域の研究に見えるかもしれないが、対象のスケールと次元を異にするから、方法的にはかなり違ってくる。経済史的には戦前の公的金融（郵便貯金）と戦後の証券史を課題としていたが、並行して様々な業種の企業の歴史研究に関わった。その中

でも貴重であったのは、有名・無名の企業人のヒアリングの機会を数多く持てたことであった。ヒアリングでは歴史を生きた諸個人の話を聞かせていただくことで、大きな歴史を微分し、その係数を計ることによって時代の方向性と勢いを析出し、切片を見出すことで「零度の時間」(=カイロス)を見定めることが出来、歴史の再構成とその中での人びとのパーソナル・ヒストリーのそれぞれの時間が分岐していくその瞬間に立ち会える。過去を回復するとはこういった瞬間のように思う。

ある時期まで、企業に関わる話題の前段として、戦争体験について話しを聞くようにしていた。経験的に、戦争体験は第二次世界大戦後の日本人にとってデフォルトであり、彼ら(全員男性であった)に一個人として「どこから来たのか」を率直に話していただきやすくなるということを知ったためである。年齢によって戦争体験は様々であったが、その体験が戦後の企業人としての生き方にどのように反映されていくかの道標になる。業種を異にしても、意外にこのようなかたちで話を始めると、戦後の企業に共通するものが浮かび上がってくるし、相手がこれまでの過去をどのように今の中に生きているかが感じられ、質問の勘所がつかめるようになる。このようなヒアリング手法がもう使えないと感じたのは、バブル期後半に入ってであった。丁度戦前と戦後を繋ぐ役割を果たした世代が、企業の前景から去っていったところに当たっている。戦後という時代の本当の終わりを実感した。

そのような貴重なヒアリング体験にあって、特に印象深かったのは3人の方であったが、すでにどなたも亡くなっている。そのうちのお2人は、鬼籍に入られて久しくもあり、歴史の一部になられたと思うので、ヒアリング内容の詳細には立ち入れないが、少し回顧してみたい。

そのお1人は、日本興業銀行総裁で、副総裁時代に経済同友会の代表幹事を務めた中山素平氏である。筆者は、もともと明治期の郵便貯金研究を進めていたが、戦後50年という機会に組織された大型研究プロジェクトにスカウトされ、躊躇いもあったが研究対象を戦後に移すことになった。とりあえずそれまでの研究の延長線をイメージし、郵便貯金資金を全額預託され、資金運用をおこなっていた大蔵省預金部が廃止され、資金運用部となる過程を、GHQの戦後改革との関係で分析することとした。入り口はそこからであったのだが、財閥解体-証券民主化、1947年「財政法」の制定等の財政金融や企業ガバナンスを巻き込んだ劇的変革の中に、戦後という時代の原型が生み出されていく過程が浮かび上がり、戦後世代であり、戦後経済史を研究する第2世代の末尾くらいに当たる筆者などには、「我々はどこから来たのか」を資料の中で回復していく格好の機会をいただいたという感想であった。

そうして戦後証券史にのめり込んでいく過程で、金融史を専門とする研究の構えを、証券史を研究する構えに切り替えていくことに少なからず苦闘した時期があった。しばらくして、「そうか、銀行業と株式市場とでは、これほどに発想や行動原理が違うのか」と気づいた。頭では「分かって」いたが、戦後改革後に定着していった銀証分離、長短金融分離、間接金融優位の戦後システムは、当事者のみならず、第2世代の研究者である筆者などの「通常モード」にまで沁み込んでいたことに深く反省させられた。歴史研究者は、事象に即した分析視点をどこかで引き剥がし、総合する視座を自前で構築していく必要がある。それが自らを歴史研究者として構築していくことでもある。このような事情で自らの研究スタンスを変えていく過程は、あたかも金融自由化、国債化、国際化の時代でもあった。高度成長後の70年代から85年くらいまでの日本経済をどのように名づけるのかは、いまでもいささかしっくりするものが浮かばないのであるが、研究者としては「我々はどこから来たのか」を問いつつ、「我々はどこに行くのか」を問われ続ける日々であった。その過程で、「我々は何ものか」についての問いを梱の底にそっと忍ばせていたように思う⁽⁴⁾。そのような時期に証券市場の研究を進めていたため、いまある

制度や市場の成り立ちを明らかにしていく過程が、当の制度、市場が変容し、崩れ行く過程と同時進行するという例外的な研究環境を味わうことになった。ベンヤミンの、造られた建築は完成されたその時から廃墟化が始まる。歴史の天使は、過去の廃墟の堆い山を一つも逃さず捕らえようと、かっと目を見開きながら、進歩という名の激しい風に後ろ向きに飛ばされていくという言葉が、実感された日々であった。

そのころ証券プロジェクトに参画させていただき、戦後証券市場の成立過程から解体と変革の過程を明らかにするうえで、もっとも重要な節目は1965年の「証券恐慌」であるとの見通しを立てていたため、この点につき旧大蔵省の1965年当時の証券担当の幹部、銀行行政の幹部であった方々のヒアリングを行うことが出来た。証券担当の幹部の方は、「今更1965年か」という顔をされていたように覚えているが、戦後証券市場を長期信用銀行との関係を踏まえて詰めてみたいと思う旨お伝えすると、うんと顔を挙げられ、少し乗り出すようにして「面白くなりそうだね」と眩かれた。当時、日本興業銀行の行方が金融自由化にとっての鍵となり、それが重しとなっていたのである。お2人のヒアリングを通じ、想定していた当該期の旧大蔵省内部のシフトとその帰結に確信が持てたのではあるが、プロジェクトを終えるにあたって、どうしてもやり残したものがあるように思われた。それは中山素平氏にヒアリングしたいという願望であった。パズルが揃いつつある中の中心部分に何か所空白があり、そこを埋めるのは中山素平氏以外いないという想いであった。

いささか説明しておかなければいけないのだが、1965年の証券危機は戦後の金融システムにあって日銀信用から外れていた証券業が行き詰まり、戦後初めて山一証券に最後の貸し手として日銀が特融を行った大事件であった。この決定をなすため日銀水川寮に集まったのが、首相田中角栄、大蔵省次官、同銀行局長、財務調査官、佐々木直日銀副総裁、民間からは日本興業銀行頭取であった中山素平氏と三菱銀行および富士銀行頭取の3頭取であった。この面子にあって、日銀総裁が入っていないことの意味等、問われるべき点はあるが、これらについては種々証言もあり、玉石混淆流布するところも多いし、また筆者自身公的に報告をなし、個人的研究も公表していることから、ここであえて詳細に触れる必要はなかろう⁵⁾。述べるとすれば、戦後改革の中で戦後日本のファイナンスの両輪を想定されていた金融と証券が、日銀の法王と称された一万田尚登日銀総裁が証券金融を日銀信用から切り離したことに起因し、国債不発行

4 もちろんこの問いは、「我々」とは何かという問いと、「何か」に名を与えることの二重の問いである。カントにおいては、先の問いの答えは明示されており、「人間」である。人間は「世界市民」として、合目的的に自然の「究極目的」とであるとされていた。その定言命法が「あなたの格率が、常に同時に普遍的立法の原理として妥当するように行為せよ」(『実践理性批判』)であることはよく知られている。定言命法は条件抜きの「~せよ」であって、「~せねばならない」or「~してはならない」の二項対立を含まない。後者は仮言命法で「~ならば」という条件付けがされる。前者が「人倫」に関わるとすれば、後者は「実定法」の問題とも言える。価値相対主義(ニヒリズム)が蔓延した21世紀初頭に、この国でテレビメディアがさまざまな事件やスキャンダルに、ここまでは「セーフ」、ここからは「アウト」と弁護士などをコメンテーターに呼んでコンテンツ化しているのを観ていて、この国では近代という時代の底が溶解してしまったのでは、あるいはそもそも近代という時代が一度としてこの国にはあったのであろうかとつくづく感じさせられた。ところでカントの定言命法のバリエーションはいくつかあり、『人倫の形而上学的基礎づけ』にはやはり有名なものとして、「あなたの人格の内なる人間性を、また、いかなる人の内にもある人間性を、常に同時に目的として扱い、決して手段としてのみ扱わないよう行為せよ」というのがある。おそらくこちらの方が、現代のこの国の人々にとって思い当たるところがあるのではないであろうか。「学歴、業績、スペック」は目的ではない。他者とのかわり、ポジションも、「使えるか、使えないか」も、ここでは問題にならない。経験世界に踏み込んでいくための序(プロレゴメナ)を通して説かれた合目的人間、カントの理念としての「自由」-実践としての「自律」の要請はそこから来ていたし、「最高善」とは言わずとも、それは「公共善」の掛金でもあったはずである。森鷗外が小説『かのように』で語るように、この国はいささか着心地の悪さを感じながらも、近代という時代の衣装あるいは意匠を装い、体を慣らし、戦後という時代を掻い潜ってきたのではなかったのであろうか。

主義からほとんど機能を止めていた債券流通市場の数少ないアクターとして、日本興業銀行・日本長期信用銀行・日本債券信用銀行という日本に特有な長期信用銀行制度が成立し、金融市場と証券市場を媒介し、戦後復興と高度成長の長期資金供給を担ってきたということである。

(因みに債券流通市場において長期金利の指標となったのは、郵電分離で逓信省から分離された電電公社の電電債であった)。果たして証券危機は金融恐慌となるシステム・リスクであったのか、メインバンクであることだけでなく、なぜ日本興業銀行の中山素平氏は、その決定的瞬間に主導性を発揮し、田中角栄とともに日銀を引きずり込んだのか、これがプロジェクトのうえで日銀特融を田中角栄に仕掛けたとされる中山素平氏に問うことの趣旨であった。それはまた証券業、長期信用銀行制度が足下で崩壊しつつある中での問いでもあった。しかし、内心本当に聞きたかったことはその先にあった。

中山素平氏は戦前に日本興業銀行に入行し、企業金融一筋にキャリアを形成したが、戦後には日本興業銀行にとどまらず、経済同友会を通じて財界、産業界に大きな役割を果たし、「財界の鞍馬天狗」と称されていた。氏が戦後経済のエポックに様々なかたちでコミットしてきたことはよく知られており、高杉良や城山三郎によって小説、評伝も書かれていた⁽⁶⁾。高齢でもあるからと懸念もなかったが、駄目元ということでプロジェクトの事務局に無理をお願いしたところ、意外にも快諾をいただいた。国際大学を設立、初代の理事長も務めておられたから、研究にも理解を持っておられたのだと思う。数名の研究メンバーでお会いすることになったが、驚くほど頭脳明晰で矍鑠とされており、ヒアリングが順調に進んでいたことから、心に潜めていた問いを口にする時が来たと確信した。それは、先にも書いたように、筆者が戦後に研究のフィールドを移した時に対象としたGHQによる財政金融改革についてであり、経済科学局長であったウィリアム・マーカット少将と交渉し、特殊銀行であったのためGHQによって閉鎖の方針にあった日本興業銀行の存続と再開を認めさせた時のことについてである。

マーカットは他方で郵便貯金を最大原資とする預金部の活動を停止させており、復興金融金庫の活動が停止され、国債は発行されず、証券市場改革がうまくいかない中、日本の戦後復興と成長のための長期資金の供給ルートが完全に閉ざされていた。占領政策が非軍事化方針から民主化方針へと移行する中、戦後復興を遂げていくためには日本興業銀行の存続と活動再開は避けられない課題であったと言える。事実この後、預金部は資金運用部に改組され、戦後財政投融资の仕組みが生み出されることで、復興と成長のための社会インフラ整備に郵便貯金資金の運用が可能になっていき、長期信用銀行による長期資金の供給が、企業の設備投資を支え、間接金融優位の体制の下、高度成長を生み出していくことになる。このこと自体の評価に否はなかった。聞いたかったのは、証券市場のプレイヤーがGHQによってある意味仕立て上げられるかたちで出発し、一万田日銀が証券金融から手を引いたことから、当面証券市場を当てにすることが出来なくなったという事情の下、マーカットとの合意が、日本興業銀行の存続は、日本の証券市場が育つまでという暗黙の了解だったのではないかと、ということであった。長期信用銀行という日本に特殊の制度が成立すれば、それを前提に証券市場は展開していくことに

5 いまから思えば、山一証券、長銀破綻という1997年足下の危機の中にあって、日本の歴史研究は、チャールズ・キンドルバーガーのようにもっと先に語っておくべきことはあったかもしれない。チャールズ・キンドルバーガー『熱狂、恐慌、崩壊 金融恐慌の歴史』(吉野俊彦訳、日本経済新聞社、2004年)。東京証券取引所『東京取引所50年史』(2002年)。杉浦勢之「1965年の証券危機—封じられた『金融危機』の構図」(伊藤正直・鶴見誠良・浅井良夫編『金融危機と革新 歴史から現代へ』日本経済評論社、2000年)。またこの時期の郵便貯金と証券危機との関係については、伊藤真利子『郵政民営化の政治経済学 小泉改革の歴史的前提』(名古屋大学出版会、2019年)に詳しい。

6 高杉良『小説 日本興業銀行 全5冊合本』(講談社、2017年)、城山三郎『運を天に任すなんて 素描・中山素平』(光文社、1997年)。

なり、なるほど日本の金融システムは見事にこのことに成功した⁽⁷⁾。しかしその成功体験が他方で証券市場のプレイヤーの成長を偏奇させ、ないしは日本特殊化させた一方、長期信用銀行の存在が金融自由化、金利自由化を遅らせることで、準備のないまま国際化の波にのまれていくことになったのではないか、だとすれば戦後の出発において描かれていたかもしれない将来ビジョンの姿は果たしてどのようなものであったのか、その時興銀はどのようなかたちの退出戦略を考えていたのかを知りたかったのである。いまから考えれば、敗戦占領下であって、興銀の存続をかけて苦闘していた氏に対し、冷や汗ものの質問であったが、おそらくそれほどに切実に知りたかった問いでもあったのである。

中山素平氏はずっと姿勢を正され、人差し指で筆者の額を指さされるとともに、苛烈な一言を吐かれた。「ああ、これが噂に聞くそっぺいさんの指差しか」と感じ入ったのを、いまでもありありと思い出す。どうやら筆者は市場至上主義者と思われた。(これは公平に言って誤解である)。しかし、中山素平氏は質問相手の不躰を咎めたり、過ちを論断したり、弁解を強弁されたわけではない。一言の下に、氏の根幹にかかわる信念と、氏が戦後日本経済に見続けていたものを述べられたのであった。筆者も誤解を解くことに意味を見出せなかった。核心はそこになかったからである。中山素平氏の、それだけ取り出すといささか粗っぽい、しかしすべてを見事に現している言葉は、肝胆相照らす城山三郎との対談ではもやもやと読後に残されていたものを吹き飛ばしてくれた。筆者はこの時、戦後の核となっていたものによく行き当たったと確信した。その言葉は、多くの戦争体験を生き、戦後という時代を構築してきた企業人の根源に共通に感じられたものを凝縮していた。そのことが「分かった」のではなく、「臍に落ちた」のである。歴史を生きたものの言葉は、おそらく一言に凝縮できる(名づけ得る)のであろう。それをどこまで今という時間に構想(自分のものに)できるか、それは君の問題だ、氏の表情はそのように語っていた。中山素平氏への問いは、「我々がどこから来たのか」を教えてくれる清々しい記憶となったが、同時に「我々はどこに行くのか」という問いは、重い課題となって筆者自身に突き返され、今日にいたっている。

もうお1人については、実は直接的ではなく、お亡くなりになった後、ご家族がご挨拶に研究室に来られた時に間接的に伺ったことである。日本銀行で長らく調査畑で活躍され、日銀史研究の第一人者でもあり、理事にもなられた吉野俊彦氏である。歓談している中、ご家族からふと「父は、いまのエコノミストがデフレの怖さを知らないこと、インフレしか知らないことをとても心配していたんです」と告げられた。好不況の循環を二度経験していないような経済評論家は信じるなということ、どこかで読んだことがあり、重大な局面で思考の手すりになってくれるのはキンドルバーガーとピーター・ドラッカーくらいかなと思わないではなかった筆者は、感服してお話を伺った。筆者自身インフレの時代に自己形成してきていたから、肝に銘じねばと思った。お帰りになってしばらくして、はたと先程の言葉は、私にだけでなく、どなたかを訪れた際に、ご家族が吉野俊彦氏の遺言として伝えておられたのではないかと気づかされた。何しろ金融史の泰斗であるとともに、森鷗外の研究者としても名が知られている。そのくらいのことがあってもおかしくはないと思わず考え込んだ。

学問の世界に入ったころ、氏の重厚な日銀についての研究書を隅々まで読ませていただいたが、デフレについての本も出されていた⁽⁸⁾。そのことをご家族に確かめる非礼は犯さなかったが、この経験から、若手研究者(もうそれぞれ中堅となってきた)が、このテクニカルター

7 この点については杉浦勢之「戦後改革と公的金融の再編成」(渡辺昭夫編『戦後日本の形成』(丸善出版、1996年)および同「戦後復興期の銀行・証券—メインバンク制をめぐる」(橋本寿朗編『日本企業システムの戦後史』(東京大学出版会、1996年)で詳述している。

ムを使う時には気にすることにしてはいる。無造作に「この期のデフレ（あるいはインフレ）は—」と口にしたときは、「ちょっとその言葉の定義言ってみて」と突き放し、ロシアがウクライナに侵攻したころ、「これでインフレになりますかね」と訊かれたときは、「スタグフレーションについて考えてみたら」と伝えた。もちろんそんなことは重々承知の相手である。しかし、これは何も嫌がらせでも、煙に巻いているのでもない。そこで一旦思考を立ち止まらせてもらいたいからである。ジャーゴンも困るが、専門語は日常語になると非常に危うい。自分も周りも、何か科学的裏付けがあるように思ってしまうが、窓から空を眺め、「今日は雨が降る」と言っているのと同じ可能性がある。そこに「エビデンスは？」などと訊くのは野暮であろう。家を出て思い切り濡れながら、その言葉を呟いてもらいたいのである。おそらくその言葉は、もっと豊かなことを伝えてくれるはずである。

3 歴史を知る

筆者の恩師である三和良一氏は、経済政策史という領域を切り拓いた大家（いまでも研究を継続されているのだから、この表現は叱られるかもしれない）であるが、まだ俊英と呼ばれていたころ、学部生であった筆者に、ご自身の新しい論文をニコニコ笑いながら手渡されると、「どお？」と聞かれるのが常であった。鮮やかに切り分けられた論理展開に舌を巻いたが、「政策と言ったって、そもそも先生には、国家とは何か、がないですよ」などとずいぶん失礼ないちゃもんをつけていた。そうするとさらに愉快そうに笑われた。これに対し、何時からか氏は「杉浦君、欲望って何だと思う」と問われるようになった。これはまた難物で、大学院に進み、ジャック・ラカンなどを読んではいしたが、今日にいたるまで回答を控えている⁽⁹⁾。何しろ業界に身を置いていれば、国家と欲望と言え、近代の二つの原理である国民国家と資本主義のことになる。近代という時代は、「我々はどこから来たのか」という問いに、あえて自然法を基底に「契約」で両者を成り立たせる「神話」を創り上げているから、その上での議論であれば、それなりの先行する蓄積もあり、議論のしようがある。しかし、その本質を国家それ自体と市場（あるいは貨幣）に求めるとなると、事態は俄かに霧の中に入ってってしまう⁽¹⁰⁾。本質を起源に求めるのは人間の性であるが、およそ言語の起源、貨幣の起源、国家の起源は問いとして難物であり、帰るべき起源を求められないという同じ理由で、言語・貨幣・国家は人間にとって「セイレーンの歌」のようなものなのかもしれない。どうやらカントの第一の問い、「私は何を知り得るか」に絡みそうな話である。

さて私的にはそういうやり取りが中心であったが、その三和氏が日本資本主義のエポックに、明治の大隈財政と松方財政、両大戦間期の井上財政と高橋財政、敗戦後の復金インフレとドッジデフレと、インフレとデフレの政策が前後して現れ、資本主義の舞台回しがなされてきたことを整理していくのは余りに見事であった。当初はシェーマ的すぎませんかとの感想を持ったが、よくよく考えてみれば、そこには文字通り生死を賭した政策論争があり、血みどろの権力闘争があったわけで、その結果が歴史のなかにクリアな対比として現象していたのである。ひとたび読む側が構想力を用いれば、簡潔かつ論理的に整理された論旨に、歴史の動態がくつき

8 吉野俊彦『歴代日本銀行総裁論－日本金融政策史の研究』（講談社、2014年）。同『日本銀行史 全5』（春秋社、1978年）。同『知恵をしぼれ！ デフレを生きる発想』（日本経済新聞社、1996年）。

9 まったく不十分ではあるが、いささかなりと中間報告らしきものとして、杉浦勢之「欲望の見えざる手」（加藤栄一、馬場宏二、三和良一編『資本主義はどこに行くのか 二十世紀資本主義の終焉』、東京大学出版会、2004年）がある。

り浮かび上がってくる。そのことに気づいてから、個々の政策を切り出し、現代の知識と理論で過去の事象に評価を加え、○×をつける議論が平板な論理空間のうえでのものに見えてくるようになった。政策担当者が何を引き受けなければならなかったのか、それを引き受ける覚悟をどのようにしたのか、そしてその可能性の条件も見えてくるはずである。加えて、三和氏の政策史研究の中でも特筆されるのは、井上財政研究との関係で分析された「労働組合法制定の歴史的意義」であろう⁽¹¹⁾。従来井上財政は旧平価解禁により、事実上厳しいデフレ政策を国内経済に強い、世界大恐慌の中で頓挫していったという否定的な評価が学会では主流であった。

- 10 国家と欲望については、ジル・ドゥルーズ＝フェリックス・ガタリによるプロジェクト『資本主義と分裂症』があり、『アンチ・オイディプス』、『千のプラトー』として刊行翻訳されているのだが、これを読み解くことと、経験科学の中で主題を展開することとの間には相当の径庭があり、覚悟がある。大学院の恩師塩沢君男氏は、共同体論を専門的に研究し、国家形成期をドゥルーズ＝ガタリも気にしていたアジア的生産様式論として、戦後の日本で早くに論じておられた。氏の共同体論と格闘する一方、ブローデルやモースなどを読んでいて、氏の研究室で「先生の生産力からとらえた基本的経営の規模論は大変論理的にすっきりしていると思いますが、縮小に向けた求心的力を考えると家族の問題はそれだけでは解けないように思われます。(つまり必要条件であっても、十分条件ではない)。共同体を課題とするうえでそこをどうとらえるかを、自分で考えてみたいのですが」と勇気を奮って申し上げたところ、にこりと笑われ、「俺、そこ切っちゃったんだよ。有賀喜左衛門なんかいるだろう、ああいうところ。すっぱり切ってしまった方が、論理的に見通しが立ってすっきりするから。そうか、杉浦は、人はパンのみに生きるにあらず、愛も必要というわけだな。やってみればいい」と鼓舞してくださった。その際、旧制高等学校時代の精神の彷徨についても話していただいた。後に気づいたのであるが、同時期にフランスでは最後のアナール派を自称するエマニュエル・トッドがこの道を歩んでおり、その後家族論から文化の多系性を析出した。ただ近刊の『我々はどこから来て、今どこにいるのか?』(原題は“Où en sommes-nous? Une esquisse de l'histoire humaine”)に接し、現代の課題に触れる時の彼の議論に首を傾げるが多かったことの意味を理解した。ゴギャンの二つ目の問いが「場所」に還元され、最後の問いが抜けているのだ。「塩沢理論」が単系説にこだわっていたのは、地政学に安易に道を譲ると神話的「古層」に掴まれ「アジア的停滞」のような宿命論に陥り、人間的自由に立ったヴィジョンが描けなくなることへの懸念であった。(トッドには2009年、青山学院大学総合文化政策学部の設立に合わせ、国際シンポジウム『帝国以後』の世界 世界経済危機と『デモクラシー以後』)をお願いしたのだが、何かに苛立っている姿が印象的で、当方側アテンドの問題かとも思ったが、同書に触れ、実は足下の危機におけるヴィジョンの問題であったのではないかと思当った)。別の折、筆者が、小林秀雄が好きですと口にする、嬉しそうに「当麻」を挙げ、「いいんだよなあ」とうっとりされた。その中の「美しい花がある、『花』の美しさという様なものはない」という有名な一句に衝撃を受けて小林を読むようになったので、とても驚いた。あの塩沢君が、ルソーの『告白』などはいささかも仮面を剥がしていないと罵倒した小林秀雄の「当麻」なのか、と。厳格な単系発展説をとるとされる「塩沢理論」は、グローバルヒストリー全盛の時代にはなかなか場所を得られないかもしれないが、歴史を論理を通して知ることの意味を、捨てるべきものを捨てるという覚悟の中に見た思いがした。理論もまた、世阿弥が言うように「秘すれば花」なのであろうか。アジア的生産様式論争と並行し、東北の農村を研究され、その後尾西の農村にまったく異なる農村の姿を見出し、マニファクチュア論争にもコミットされていたことの背後に、氏が厳しい方法的抑制を自らに強いることで研究を模索されてきたことを知らされ、戦争を通過した世代の知性の手強さに触れた瞬間であった。カントを読み直そうと考えるに至ったのも、このような経緯から、学の基礎づけの必要を感じていたことと、先に述べたドゥルーズが影響している。ドゥルーズは、1995年病いに苦しみ、自宅のアパルトマンから虚空に身を投じた。ポストモダンのずいぶん長い時を経て、最近になって原国家と文明についての最新の議論として、人類学者であるデヴィッド・グレーバーと考古学者であるデヴィッド・ウェングロウの2人のデヴィッドによる新刊『The Down of Everything A New History of Humanity』が刊行され、日本にも『万物の黎明』として翻訳された。同書は、先行する世界の人類学と考古学のケース・スタディーを網羅収集し、長らく講義で学生たちに問いかけてきたホップス・ルソー問題に鮮やかな解を見せてくれ、世界的な議論を巻き起こしている。『価値論 人類学からの総合的視座の構築』、『負債論 貨幣と暴力の5000年』、『官僚制のユートピア テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則』と注目すべき大著を次々に公表してきたグレーバーであるが、彼もまた残念ながら新刊が遺作となってしまった。59歳、死因は急性肺炎、定かではないが、COVID-19下での死であった可能性があるらしい。ドゥルーズ、グレーバーもまた、セイレーンの歌を聴いたのであろうか。人類帰還のオッドッセイアは、いまもまだ続いている。エマニュエル・トッド『家族システムの起源 I ユーラシア 上下』(石崎晴己監訳、藤原書店、2016年)。同『我々はどこから来て、今どこにいるのか 上下』(堀茂樹訳、文藝春秋社、2022年)。デヴィッド・グレーバー、デヴィッド・ウェングロウ『万物の黎明 人類史を根本からくつがえす』(酒井隆史訳、光文社、2023年)。
- 11 三和良一「労働組合法制定の歴史的意義」(安藤良夫編『両大戦間期の日本資本主義』東京大学出版会、1979年)。後に同『戦間期日本の経済政策史的研究』(東京大学出版会、2003年)に所収。

三和氏はこれを対外競争による淘汰を通じて、生産力を強化することを目的としたもの（＝産業政策）と捉え、さらにその負の効果を想定し、その対策として労働組合法の制定により、労働側にカウンター力を与えることを目指していたとしたのである。財界の反対で実現されなかったが、政治的に無産政党に有利なこのような政策（政敵に塩を送る）を、あえて試みた立憲民政党的の浜口雄幸内閣の井上財政には、それだけの政策としての奥行きがあったわけである。

サッチャー政権に始まる「新自由主義政策」を目の当たりにしたいとなれば、このような包括的政策には、井上なりの歴史的構想力が働いており、強い決断を支えていたと言わねばならない。惜しいことに、政権を下野した井上準之助は、選挙活動のさなか、血盟団によって暗殺された。この井上に代わって財政を担ったのは高橋是清であったが、金平価再禁止と低為替政策を採るとともに、周知のとおりケインズに先じる財政スペンディング・ポリシーを、赤字国債の日銀引受けによって断行した。これにより日本経済はいち早く世界大恐慌－大不況の中で、昭和恐慌から立ち直りを見せたが、それが可能であったのは、三和氏によれば、井上財政の効果が効いて日本経済の生産性が高まっていたという前提があった。高橋是清は自らの政策効果を計るため、物価の動向をこまめにモニタリングし、政策の出口を常に探っていたことが知られている。出口政策への転換を決断した刹那、高橋もまた2・26事件で凶弾に倒れている。第二次世界大戦への分岐点となったこの二人の財政を一体で見たときにはじめて、個々を見るのでは分からない、歴史の動態とそれを生きるこの意味が分かってくる。歴史を知るということはそういうことであろう。

巷では、インフレやデフレを徴候としてではなく、手軽なツールであるかのように議論している。昭和恐慌を経験した吉野俊彦氏の訓戒を真面目に受け止めるのであれば、現状はデフレしか知らない世代に占められつつあり、インフレの怖さを知らなくなっている。インフレという現象は、政策スイッチを切れればただちにON—OFFできるようなものではない。ある条件の下では、大量の資金供給は物価騰貴として現れずとも、土地や株式のような供給制限のある資産のバブルとして現れることもあるし、インフレ利得が生じれば、政策転換への抵抗は、陸軍ほどではないにしろ熾烈なものとなり得る。教科書通りの効果が期待されるわけではない。一方デフレを生む政策となれば、国民の理解を得ることは至難である。日本で意識的デフレ政策を採って殺されなかったのは松方正義で、例外はドッジラインである。これは、GHQ、すなわちアメリカの圧倒的パワーを背景としていた。デフレ政策とは言えないが、自ら赤字国債の道を開いた大平正芳は、赤字国債の削減のための財政再建を掲げて戦い、選挙のさなかに急逝している。積極—消極、インフレーション—デフレという二項対立の議論は、それ自体に意味があるわけではなく、歴史の巡りあわせの中で、何を問題とし、歴史的前提に立って何を引き受けるかを問うことが問題なのである。変動相場制と資本のグローバル化した現代にあっては、不確実性はいつそう高まらざるを得ず、国民各層への影響も一義的とはならない。（経済においてはこちらのほうが、世代間断絶より本質的である）。この意味で、やたらな愛国主義より、井上にしても、高橋にしても、大平にしても、公益という言葉のさらに根源に、公共善（＝われわれ）を秘めていたように感じられる。（そういえば、大平正芳はクリスチャンであった。クリスチャンにとっての究極は言うまでもなく最高善である）。それは積極財政—消極財政という政策手段の競い合いとは次元の異なる問題であろう。「我々はどこに行くのか」は、「我々は何ものか」と鋭く切り結ばなければ正当化されず、その政策は痩せ細っていかざるを得ない。なぜなら、政策は、歴史の中では両義的にしか効果を生み出さないからである。いま我々が「不安」にあって、あいまいさと嫌うもの、それは歴史の両義性である。

4 歴史を伝える

文化をとりあえず、ヒトとヒトとの、ヒトとモノ（自然）との、そしてまたモノ（人工物）を媒介としたヒトとヒトとの関係のスタイルと考えてみよう。ヒト—ヒト関係、ヒト—モノ関係、ヒト—モノ—ヒト関係とも表記出来る。これは空間的表現であるから、コミュニケーション過程であり、労働過程と交換関係も含んだ社会関係となる。さらにこのヒト—ヒト関係、ヒト—モノ関係に過程という時間を入れ込んでみると、世代と技術変化を取り出せる。このような関係性の時間への投射によって織り出されたものを地質学的に層化すれば、「文脈としての文化」が浮き上がる。これは歴史が私たちを用意する文化である。しかるに文化は今この時に、新たに創造され、それが棄却されなければ、結晶して「文脈としての文化」に編み込まれあるいは沈殿して回収される。この結晶の刹那が「作品としての文化」である。作品は私たちが歴史に用意するものであるが、なお作品が貨幣という質を量に変換するメディアを通過し、商業的關係に算入されれば、それは商品コンテンツと呼ばれ、ヒト—ヒト関係を通じて流通させられることになる。いささかカリカチュアしているが、講義の中で学生にそのようなことを話すことがある。実際は、このような文脈は同一社会のなかにあっても複数あり、その文脈間の価値の共認可能性が大変難しいというところに発展するのであるが、たいていの学生は、それ以前にきょんとした顔になっている。（アートマネジメントなどはその典型なのだが）。学問が対象領域を持つからと言って、対象領域がそれとして実在するわけではない。人がそのように弁別して行動しているだけである。多くの場合、それは学生の単位取得条件か学者の飯のタネに終わる。と言い切ってしまうのはさすがに気が引けるが、パースペクティヴが交差し、ディシプリンが翻訳されあう中で浮かび上がってきてしまうもの、領域区分では尽くし切れないもの、共認不可能性によって残されたもの、その余剰にこそ、まだ名前のない価値が生まれるのだということくらいは伝えたい。

そんな時は、度胸のありそうな学生にお願いして、個人情報に問題ないか尋ねたうえ、フルネームを教えてもらうことにしていた。ファミリーネームは、あなたを用意した命の流れである。つまり「あなたはどこから来たか」に名を与えている。ファーストネームは、親御さん（ないしそれに代わる誰か）が「あなたがどこに行くのか」に願いを込め、名を与えたものだ。このへんは学生も頷いてくれる。ところで、いつからあなたは自分のことを「○○ちゃんは」とか「××は」とか言わず、「私は」と言うようになったのかなと訊くと、だいたい幼稚園・保育園の上級当たりと答える。小学校への準備でもあろう。そこで話を引き取り、「○○」や「××」は、相互に変換不可能だが、「私」となったときから、一人一人は、同等無差別のものとなる。（ウィリアム・ブレイクの書『ミルトン』の「悪魔の碾き臼」は、カール・ポランニーの言うような市場経済だけのことではない。近代の学校制度にも多分に同じところがある）。ところで「私」は主部であるが、これには述部が付く。「私は私である」というのは、文脈を除いてしまうと、真理ではあるが無内容なトートロジーになってしまう。述部が主部にない何かを与えられていれば、それが主部を豊かにするだろう。「だから『私』って何と考えるより、何か好きなものを見つけてきてください。それこそがあなたなのだから、『私たち』はそれを共に味わうことすら出来るだろう。そうすれば味わいも思わざるほど豊かになるのでは」と締めくくる。言うまでもなく、カントの総合判断（synthetisches Urteil）についての議論の転用である。（後段はノヴァーリスの『ザイスの学徒』がインスピレーション元である。ノヴァーリスは「どこへ行くのか」に対し、「いつも故郷へ」と応えたが、それは後期ロマン派の陥っていく神話的Nationにではなかった）。さらにMitdaseinくらいまで思いめぐらせてもらえば上

出来であろう。あとは4年間の中で「腑に落ち」てもらおうか、卒業してから立ち戻れる「謎」として記憶の棚に残しておいてもらえればいかなと教室から出ていく。

人類学的には、文化はマナー、習俗、規範、技術・知識の伝達の体系と捉えられる。コミュニケーションの縦の系列が親子関係であり、横の関係が世代である。これに加えて世代を跨ぐ斜めの関係がある。これは学校などが当たるだろう。このように見てくると、現代が歴史忘却の時代である理由が見えてくる。技術の著しいスピードでの変革は、上の世代の知識の陳腐化の速度をも加速し、下世代の手すりの役を果たせなくなる。それがコミュニケーション技術とリテラシーにかかわっている分、断絶はより厳しいものにならざるを得ない。自ずと下の世代は、世代内での知識交換に偏重するようになるが、その場合は、コミュニケーションの前提としてポジションの確認という準備作業にコミュニケーションのエネルギーの多くを費やさざるを得ないことになる。ほとんどそれだけがコンテンツの中身であるというのが、情報爆発の実情であろう。しかし、電子的世界には大人たちがとらえ切れていない変化が生まれつつあるように感じる。先のように説明した後、「私がメディアだったんだと腑に落ちました。それでいまここにいるんですね」と声をかけてくれた学生がいた。

三木清は「世代」に、芸術のモード以外大きな意義を持たせなかったが、果たしてそうであろうか。この国の人々は、「空白の三十年」に「停滞」を見ているが、社会のなかでは、変化が加速しつつあるのではないか。少子化はとっくに進んでいたし、人口減少もまた、予想されていた。ところが労働力不足は確実にやってきていたのにもかかわらず、そのことが表層に露になったのは、つい最近のことである。バブル期の供給力、負債、雇用の3つの過剰をなし崩しに終わらせていく過程で、技術変革の根幹部分から目を背け、そこに育つ世代を自己責任論で覆いかぶせてしまった結果である。その間に技術的用語を仮装し、「シンギュラリティ」などというマーケティングに都合のいい脅し文句が科学的必然のように巷間に出回ったり、「世代間闘争」などが煽られたりしたが、この国のデジタル・ネイティヴは、「陰謀論」や「ポジション・トーク」がはるかに及ばない、もっと深いところで変身しつつあるように思われる。しかもそれは、COVID-19という、パンデミックの同時代現象を通じ、グローバルに同世代を創り出しつつある。多くの犠牲を出したそこから何が生み出されるのか、美しいものも醜悪なものもあるであろう⁽¹²⁾。(何しろ歴史は両義的である)。スクール・カーストさえ終わらせられれば、この国にも次の世代の表現が素直に浮かび上がってくるに違いない。親たちが「停滞」を嘆いている間にも、子供たちは変化している。このような事態を名指せなかったからこそ、我々は苦し紛れに「空白」と言うしかなかったのではないだろうか。(Z世代はX世代後の没意味化された記号である。しかもその後は用意され得ない)。

いまや「氷河期世代」は、社会の主要な担い手となってきている。いつからか、我々は経済でしか世代を名づけられなくなり、この世代を凍結させたままできてしまった。だが経済は「停滞」していても、社会が「停滞」していたわけではなかった。変化に名を与えられなかっただけである。そろそろ、彼や彼女たちに「我々がどこから来たのか」を伝えるべき時が来ているのではないだろうか。生成AIには、身体がないから時間がない。若干23歳でコミック『進撃の巨人』を開始し、デビュー作ですでに古典的な評価を得、アニメ化された諫山創は、自由と運命との関係性を座標・道における時間・空間の交錯によって描き出すことで、身体と夢・集合記憶という別のかたちを通じ、事実上このことに応答している。このような構想力は、日本

12 それにしても、あの時ことさらに美辞麗句で感謝の言葉を浴びせられることになったエッセンシャル・ワーカーの待遇についての議論は、いまだここに行ったのであろう。最近、その言葉すら寂として聞こえてこない。

のサブカル(コミック・アニメやゲーム)のイメージの大きな源泉ともなっている北欧神話(エッダ、サガ)やギリシャ神話に着想を得ており、表象的にナポレオン戦争に遭遇してしまったゴヤの「わが子を喰らうサトゥルヌス」とも重なる。「巨人」のほうはゴヤの作でないことが確定している)。ローマ神話の農耕神サトゥルヌスは、ギリシャ神話のウラノスと習合(ブレイクはそれに倣っている)されたが、ウラノスは時間の巨神(タイタン)であった。手法的には視点転換によって神話的時間を順行・逆行させつつ、空間における上下の逆転、彼我および自他の入れ替わり・交錯、内外の裏返し(クラインの壺)を駆使し、ブレイクの読み取ったミルトンの『失樂園』のように観る側の善と悪とを混淆させている。

サブカル批評に立ち入るつもりはないが、ループもの、セカイ系に依るように観えながら、不思議とそのどちらからも逸れており、すべての決断と選択は両義的で、宙づりされている。「タイムリープ」を予感させる最初の場面は、ティークの『金髪のエックベルト』の悲劇を宿命づけた「犬の名」が口にされる決定的瞬間を想起させ、始めと終わりの暴力により作品は神話的に封じ込められている。主要人物は命の期限を画されているが、その帰結まで丁寧に寄り添われており、その都度完結され、無数の物語となって繋がっていく。(つまり人生に、二項対立となり得ない政治・経済・社会あるいは技術が縦横に張り巡らされている)。主人公(?)はその自由な意志によって、神話的暴力そのものである自らの憤怒と命をミカサによって絶たせ、「ラグナロク」(神々の黄昏)を終わらせる。普遍と特殊、一般と具体、自由と運命とが奇妙に織り込まれていて、未だ名指すことができない作品である。そして作者の予期せざる結果であったかもしれないが、壁に閉じ込められているのは、実は今も壁を作り続けるイスラエルの方ではないのかという、現在のガザ紛争にまで届いている。(['暴力批判論』のベンヤミンはそのことをよく知っていたし、彼の死後、3人の熱い友情にもかかわらずハンナ・アーレントとゲルショム・ショーレムとが政治的シオニズムをめぐって分かれていった理由もそこにあっただであろう)。この作品はベルリンの壁崩壊と9・11の中で育った作者によって構想され、リーマン・ショックと東日本大震災発災の間に連載が始まり、ネット動画配信やSNSの爆発的な拡大と同時進行で進められ、COVID-19の渦中に終了した。おそらく日本の地方の盆地から始まった若者の織りなした物語『進撃の巨人』の世界的受容は、このことと無縁ではないであろう。「歴史の終わり」が売れ筋のコピーとなり、多幸性に陥っていたミレニアムが終わりを告げ、神話的暴力が見え始めていたこの時期に、このような作品が生まれる可能性、ないし蓋然性はすでに感じられていた。それが日本の若者の作品として現れたことを言祝ぎたいが、それを新たなメタ「神話」に回収する必要はどこにもない。

我々の行くであろう未来は、生身の世代としてすでにそこにいる。それを「手段」としてではなく、「目的」として見ればいい。ドイツローマン派やカーライルが希求した天才や英雄の時代はとうに去ったのであるから、生産性を問うよりは、創造性や機知を貴ぶほうが楽しいに決まっている。(夏目漱石は端からそう言っていた)。电脑世界には、カミがあまた溢れかえっている。(その多くが似非であったり、いま一度の様々な意匠であったとしても真正な表現もまた生まれつつある)。カントは、ニュートンの世界に合わせて人文学を鍛え上げようとしたが、芸術にはいささか難しい場所を用意した。今は人文学や芸術が、技術にその意味と可能性を伝える「時」であるように思われる。

そのような時代には、やはり名づけが重要になるであろう。創造の場は、定義上名を持たない。しかし文化伝達には名が決定的な意味を持つ。この国にはかつて通信省という官庁があった。今ではその名を知るものも少なくなってしまったのではないかと恐れるが、もともとは農商務省逓信局および管船局と工部省電信局および灯台局が移管され、その後に様々な運輸関係

を所管するようになっていった。通信とは、その母体の名の一部を組み合わせたものである。2つの時代の異なる技術を1つに総合して名づけられた。そのこと自体が、この省の当時における歴史的課題を引き受けている。戦後GHQによって郵政と電気通信が分離され、行政改革を通じて今では日本郵政、NTT、KDDIなどに民営化されている。長らくその名を残していた施設の通信総合博物館も郵政博物館に、通信協会は通信文化協会に名前を変え、通信の名を残すのは東京通信病院くらいであろう。郵政の歴史を遡及的に考えていくと、駅通寮に辿り着かざるを得ないのだが、そうすると通信省の日本に持った役割と意義を確認することがあらかじめ思考の中で遮られることになってしまう。それぞれの組織が「どこからやって来たか」を不可視化してしまうことになりかねない。つまり、現在からの時間的遡行で得られるものと、起点を置いてそこから時間的に順行していくのでは、見えている歴史の景色が全く変わってしまう。とりわけて遡行するときに落とされるのは当事者たちの心意に染められたパースペクティブ（past future）—我々を生み出すことになった構想力である。何もここで機能的に分化し、変更されてきた名前（それらも歴史に織り上げられていく）を元に戻すべきであると言おうというのではないが、本年には日本郵政、NTTともに大きな改革の動きがありそうである。是非ともそれぞれが、「我々はどこから来たのか」、「我々は何ものか」を問うことで、「我々はどこへ行くのか」を構想して行ってもらいたいと希って止まない。我々の未来は、その中で育ちつつあるのだから。

(すぎうら せいし 青山学院大学名誉教授)